

「平和を希求し、チャレンジする国際的教養人」を育てる 広島大学

高大接続・入学センター長 永田 純一 准教授



世界トップ100の総合研究大学を目指す

本学では、2016年度入試において英語外部検定試験をAO入試に導入した後、その成果を踏まえて2019年度入試より一般入試においても活用してきました。採用している英語外部検定試験は英検、TEAP、IELTSなどの8種類で、他の国公立大学に先駆けて入学者選抜での活用に取り組んできたのです。

その背景には、2006年度より本学独自の教育システム「到達目標型教育プログラム (HiPROSPECTS®)」を開始させたことが大きく影響しています。本学では14年前から、グローバル人材を持続的に輩出していくことを目指して、英語教育や入試の変革を進めてきました。さらに2014年度に「スーパーグローバル大学創成支援事業」(トップ型)に選ばれたことが、より一層自信を持ってこれらの変革を加速させる後押しになったといえるでしょう。

2021年度入試からは、一般選抜において英語外部検定試験を出願要件とはせず、英語外部検定試験で一定の成績を収めた場合には「みなし満点」として活用することとしました。文系理系のバランスがとれた総合研究大学として、今後も「平和を希求し、チャレンジする国際的教養人」の育成を目指します。

文化や言語が異なる人々と 世界をキャンパスに学ぶ

「国際平和文化都市」として世界に知られる広島には、さまざまな国の人々が訪れます。本学にも、「ぜひ、この地で学びたい」との思いを持った留学生が世界71カ国から集まり、その中にはアフガニスタンやイラン、シリアなどの紛争地からの留学生もいます。日本の学生にとって、普段なかなか出会うことのできない国の人たちと肩を並べて議論することは人生においても貴重な経験となるでしょう。英語運用能力を身につける究極の目的は、文化や言語が異なる多様な人々とコミュニケーションを取り、共に平和な

世界を創っていくことです。英語外部検定試験を導入したねらいは、英語4技能を主体的に身につけ、他国の人とコミュニケーションを図りたいという意欲とチャレンジ精神を持った人を迎え入れたいという期待があるからです。

外への関心を持ち続け 新しいことに意欲的に挑戦してほしい

2020年度は新型コロナウイルスの影響で、世界中が未曾有の事態に見舞われました。飛行機が飛ばない、海外へ自由に行き来できない、大学へも行けないなど、いろいろな動きがストップしてしまうことで、学生だけではなく世の中全体が内向きになり、視野が狭くなってしまいがちです。しかしそういう時にこそ、視点を内側ではなく外側へ向けてほしいと思います。「グローバル」という言葉は、言い換えると「外への関心を持ち続けること」ではないでしょうか。

学生が、日本語以外の英語や外国語を学ぶということも、外に目を向けることのひとつだと考えます。受験生や学生の皆さんにはぜひ、自分の殻に閉じこもらずに「新しいことに挑戦する」という心持ち、心の態度を大切にしてください。もちろん授業も大事ですが、例えば、英語外部検定試験などに自ら目標を立てて挑むことにも意義があります。英語の「読む」「聞く」だけではなく、「話す」「書く」力をつけていくことが、受け身ではなく主体的に物事を考えて行動するための訓練になるはずです。本学では今後も、新たな世界に一步を踏み出すことのできる意欲を持った学生を求めています。



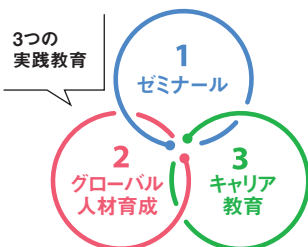
TEAPに挑戦した“意欲”は、将来の可能性を広げる礎に 中央大学

経済学部 経済学部長補佐 小森谷 徳純 准教授



経済学部が目指す教育に マッチしているためTEAPを活用

中央大学経済学部では、総合型選抜（旧AO入試）と一般選抜の一つ「英語外部検定試験利用入試」の中で、TEAPスコア（4技能パターン）を利用しています。本学部は、TEAP活用の初期段階から英語外部検定試験を入試に積極的に取り入れておりますが、その理由の一つに、経済学部が目指し、実施している教育にマッチするだろう、という考え方がありました。それは「中大経済ならではの取り組み」で、「ゼミナール」「グローバル人材育成」「キャリア教育」という“3つの実践教育”で社会人基礎力の育成を強力に支援する、というものです。経済学部の教員は全員、自分の専門にかかわらずこのコンセプトを共有し、学生の指導にあたっています。TEAP利用入試や英語4技能と言うと、グローバル人材育成への好影響を考えがちですが、それだけでなく“3つの実践教育”すべてに良い影響を与えていると考えています。



英語4技能を高めたい“意欲”を すくい上げる役割も担っている

TEAPの良い点の一つは、英語ネイティブではない高校生がアカデミックな英語に挑戦していける場所だと思っています。そういう高校生はたとえ無意識であっても、「将来の自分が生きていく世界とグローバル化はリンクしている」と感じ、そのために英語4技能を高めたいという“意欲”を持っているはず。TEAPは、その意欲をすくい上げる役割も果たしていると考えます。そして、中大経済の「3つの実践教育」では、学生たちのこの“意欲”をより大きく成長させたいとしています。経済学は世の中の

疑問について、問題を解決するための手順や方法を得られる学問であるとの考えのもとで指導していますが、「ゼミナール」「グローバル人材育成」「キャリア教育」のすべてにおいて、前述した“意欲ある学生”は非常に大きな成長を遂げ、周りにも良い刺激を与えています。例えば、「ある疑問について調べなさい」と言うと、ほとんどの学生は日本語の文献を調べようとします。しかし、研究者の世界では英語文献にあたることが当然ですから、学生にも英語文献をひも解き、アカデミックな世界に足を踏み入れてほしいと思っています。そういった時、TEAPに挑戦した“意欲”のある学生はポテンシャルが高く、飛び越えやすいのではないかと感じます。

TEAP利用者が増えることは ポテンシャルの高い学生が増えること

現在、「英語外部検定試験利用入試」の中ではTEAP利用者の割合が3〜4割と一番高く、年々増えています。つまり、本学部の教育コンセプトにマッチした学生が少しずつ増えているといえるでしょう。それとともに、意欲を持って入学し、“3つの実践教育”によって成長を遂げた人材を多く輩出していくことができるようになる、ということだと信じています。一般選抜における「英語外部検定試験利用入試」でのTEAPの利用は2021年度入試で5回目となり、最初の利用者が社会に出始めました。私たち教員も、「TEAP利用者が増えることは、ポテンシャルの高い学生が増えること」と捉え、教育内容をブラッシュアップする必要が出てくるのかもしれない。このように入試におけるTEAPの利用は、本学部が掲げる「社会人基礎力の育成を強力に支援する」を目標に、少なからず好影響をもたらしていると考えています。



高校生の世界を広げ、“考える力”を育む

工学院大学附属高校

英語科 中川 千穂 先生

生徒にとって英語を学ぶ以上の価値がある

本校では、英検、IELTSなどさまざまな英語検定に取り組んでいます。その中でTEAPは、高校2年時に1回全員受験し、3年時にも再び全員で挑戦していきます。少しずつステップアップしていくために、高校2年生で一度自分の实力を知っておくことが重要です。

TEAPを活用する一番の利点は、単に英語が学べるということに留まらず、「広い視野」や「多角的な考え方」が身につくことだと実感しています。例えばライティングの問題には、さまざまなジャンルの読み物があり、そこには必ず相反する二つの意見が出てきます。決してどちらが良くてどちらが悪いという結論が書かれているわけではなく、これから大学進学を目指そうという若者に向けて問題提起をし、自分で考えるきっかけを与えてくれます。

TEAPで扱われる問題には、海外の生活や文化、環境問題や交通事情などのほかに、理系の生徒が関心を持つような天体や力学的なテーマなど、高校生の知的好奇心を刺激する内容が多く、生徒も私たち英語科教員も興味深く取り組むことができます。生徒からは、「英語で読むことは難しくても、日本語で読んでみたらすごく面白くてためになった」などの声をよく聞きます。TEAPで学んだ物事の見方や考え方、問題解決の方法が、高校2年生で取り組む「探究論文」にも役立つため、生徒にとっては英語を学ぶ以上の価値があると感じています。

「グローバルとは何か」を自分の言葉で理解する

青年期と呼ばれる高校生時代は、自我が芽生え、自分と人とは違うことを認識し、まさに自分探しをしている時期です。生徒たちはそれぞれ葛藤を抱えながら、日々を過ごしています。「グローバルとは多様性を認めることだ」と頭では理解していても、実際の生活や身近な仲間同士との関わりの中では、まだまだ視野が狭く、一方向でしか物事を見ていない場合があります。そのような成長過程にある高校生が、TEAPの問題を繰り返し取り組むことによって、自分の意見だけ



を主張するのではなく、自分とは異なる意見も受け入れながら論理的に伝えることの大切さに気づきます。客観的事実と自分の意見を分けて考える習慣づけができるのです。つまり、英語学習を通して大人になるための訓練をしていると言えるでしょう。

今年は、新型コロナウイルスの影響で、留学や海外のイベントに参加することが難しい状況ですが、オンラインを使って週に1回海外の学校と授業を行ったリ、タンザニアやルーマニアの方々と家族同士で交流をする機会を設けたりするなどの試みを積極的に続けています。生徒たちには、どんな状況下でも、本校が掲げる「挑戦・創造・貢献」という言葉を胸に刻んで行動してほしいですね。将来、自分の好きなことを見つけて社会に貢献できる人になるために、“考える力”を身につけてほしいと願っています。



採用事例

大学受験や社会を学ぶ良い機会になる

TEAPの団体専用クーポン利用型申し込みは、生徒が自分の行動に責任を持つための良いきっかけになっています。本校では高校2年生と3年生が全員で受験しますが、高校2年生の時期に、生徒自ら申し込んで、自分で会場に行き、個人で受験するという経験は、3年生での大学受験においても必ず役立ちます。

TEAPの受験は、生徒たちにとって日本全国に頑張っている高校生がたくさんいることを知る貴重な機会になっています。例えば、いつものように大人に任せきりでボヤッと過ごしていたら、定員が埋まって受けられない場合もあります。「受験するのは他の誰でもない自分だ」という意識を持ち、日頃からスケジュール管理をしていなければ、インターネットで申し込みができる今の時代、一瞬にして

受験するチャンスさえ逃してしまう可能性もあるのです。

学校の定期テストとは違い、TEAPを個人受験するということは、社会を学ぶという意味もあります。ただ単に試験を受けるのではなく、「申し込み」ことから生徒たちの学びは始まっているのです。「自分の責任で受けられなかった」と痛い目にあったり、「受験に必要な暗証番号を忘れてしまった」と困ったりすることも、また勉強です。先生や親から言われるのではなく、自分で失敗して初めて「次はこうしよう」という行動につながっていきます。

ついつい手を差し伸べたくなる状況の中、私たち教員もいい意味で生徒たちを突き放すことができるので、団体専用クーポンを利用して良かったと実感しています。